■ 特集「人間関係原論」

4 「繋がりというテーマーをあたえられて」

1992・12・11

中 堀 仁四郎 （元南山短期大学教授）

・今日は皆さんに2つの文章を紹介したい。これらは私が途中からこの原論チームに加わり、他のスタッフから2年の後期からは『繋がり』というテーマですすめているということを聞いたときに、私の脳裏をよぎった物語と詩である。なぜそれがすっと浮かんできたのか、私にもうまく説明がつかないのであるが、それを皆さんに提供しようと思う。それぞれの物語を、皆さん一人一人が関連をつける、つまり “繋いで” くださると私の意図していることは少しは達成されるように思うのであるが、それではあまりにもぶっきらぼうすぎるので、少し説明を加えたい。紹介したい一つは次に引用する 旧約聖書 創世記1章の物語である。

1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。
「光あれ。」こうして、光があった。4 神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、5 光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。
6 神は言われた。
「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」
7 神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。8 神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。
9 神は言われた。
「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」
そのようになった。:10 神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。:11 神は言われた。

「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」
そのようになった。:12　地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。
:13　夕べがあり、朝があった。第三の日である。
:14　神は言われた。
「天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。:15　天の大空に光る物があって、地を照らせ。」
そのようになった。:16　神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。:17　神はそれらを天の大空に置いて、地を照らさせ、:18　昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。:19　夕べがあり、朝があった。第四の日である。
:20　神は言われた。
「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」
21　神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。:22　神はそれらのものを祝福して言われた。
「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」
:23　夕べがあり、朝があった。第五の日である。
:24　神は言われた。
「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」
そのようになった。:25　神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。:26　神は言われた。
「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」
:27　神は御自分にかたどって人を創造された。
神にかたどって創造された。
男と女に創造された。
:28　神は彼らを祝福して言われた。
「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」
:29　神は言われた。
「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。:30　地の獣、空の鳥、

地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」
そのようになった。:31　神はお造りになったすべてのものを御覧になった。
見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。
2: 1　天地万物は完成された。2　第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、
第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。　3　この日に神はす
べての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別さ
れた。
4　これが天地創造の由来である。

（創世記１：１〜２：４ 新共同訳 聖書　日本聖書協会）

・これは 有名な創造神話である。字義どうりに、起こった出来事として読む必要はない。神話とは人生、社会、世界について人々がその意味を問うて行く中で生まれてきたものである。長い時代を通して語り伝えられてきたもので、それは世界や、人間存在の意味に対する人々の洞察が結晶したものである。決して史実が書かれているのではない。

・神が天地を創造されるのだが、「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」。神が「光あれ」といわれると、光があった。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜とよばれたのである。

・神は言葉によって 混沌と闇の中から、光と闇をわけ、天と地を分け、生き物をつくりそれを良しとみられる。 言葉には力がある。それはものごとを分け、それぞれに位置を与え、秩序を与えるのである。

・言葉には混沌に秩序をあたえ、ものを分かち、分かったものに繋がりをつけ、意味を与えていく力がある。関係づけていくということである。言葉のあるところに繋がりができる。 混沌、癒着、どろどろとして一体になったもののなかには 繋がりは無い。

・この世界には混沌と秩序づけがいつも 繰り返して出てきているのではないだろうか。そこには 私たちには全部知り尽くすことのできない、私たちを超えた意志、言葉があるのだろう。

・混沌と秩序付けということなら、私の部屋でも同じようなことが起こる。よく混沌とした状態になる。諸物は用を足さなくなる。そこで 区分けをし、置き換える。秩序が出来る。それぞれは 分かたれ、関係づけられ、機能して行く。しかし、それはちょっと油断していると 混沌になってしまっている。

・私たちが造られたものとして、私たちをを超えて、初めからあった 秩序、言葉、 真理を私のものにすることができるためには、ことがらに 出会い、それにきづき、それを区分けして行くことによるのだろう。そこに私たちの意識、言葉があり、さらにそれは私たちの言葉になっていく。　用心深く、謙虚に出会って、分けて、繋げていくことで私たちは私たちを超えたもののなかに生きて行くことができる可能性をもつのである。

・私は最近になるまで、言葉をないがしろにしてきたようにおもう。物事を事柄として受けとめておればそれでいいのだと思っていた。その方が嘘が無いという風におもっていた。しかし、言葉はその人にとって大切なのだということが少し、ほんの少し分かりかけてきたように思う。

・分けて、繋げて行く。しかし、ごちゃごちゃはいつも忍び寄ってくる

・次に紹介したいのは「結婚について」というハリール・ジブラーン（１８８３〜１９３１）の詩である。

結婚について

K．ジブラーン　神谷美恵子訳

結婚についてお話しをどうぞ、とアルミトラが言うと彼は答えて言った。

あなたがたは共に生まれ、永久に共にある。
死の白い翼が二人の日々を散らすときも
その時もなお共にある。
そう、神の沈黙の記憶の中に共にあるのだ。
でも共にありながら、お互いに隙間をおき、
二人の間に天の風を踊らせておきなさい。

愛し合いなさい、
しかし愛をもって縛る絆とせず、
ふたりの魂の岸辺の間に
ゆれ動く海としなさい。
杯を満たし合いなさい、
しかし一つの杯から飲まないように。
ともに歌い踊りよろこびなさい。
しかしそれぞれひとりであるように。

リュートの弦が同じ音楽でふるえても
それぞれ別のものであるにも似て。
自分の心を（相手に）与えなさい。
しかし互いにそれを自分のものにしてはいけない。
なぜなら心をつつみこめるのは生命の手だけだから。
互いにあまり近くにたたないように。
なぜなら寺院の柱は離れて立っており
樫や糸杉は互いの影にあっては育たないから。

・自分が自分であるということを実感するのは、全てが私であるときではない。自分と相手とがどのような関係にあるか、どのように繋がっているか、ということが私を実感させてくれるようにおもう。 どのように繋がっているか、すなわち、どのように分かれているかということが分かる時である。ジブラーンの詩はそのようなことの大切さを言っているように思う。癒着している時には繋ぐものもない、したがって関係もない。

・私と人とを繋げているその繋がりには4つの色合いのものがある。

I'm OK , You're OK
I'm OK , You're not OK
I'm not OK , You're OK
I'm not OK , You're not OK

・どのように繋いで行くか、その責任は私の中にある。

・始めからあるつながり、それを気づき、自分で発見して行くときに生まれるつながり、それを繋いで行くのが生きて行くということかもしれない。だからどう生きるかはどう繋いで行くかにかかわってくるのだろう。

・以上 少々混沌としているようにも思えるのだが……、今日の話しはこの辺にしておきます。　あなたが 分けて、繋いで いって下さい。